

大学・学部への併願行動の一貫性

——第1回の受験機会の複数化の場合——

大学入試センター・池田輝政・鈴木規夫・前川眞

はじめに

昭和62年度より国公立大学の受験の機会が従来の1回から2回に増えることとなった。昭和53年度入試まで国立大学の入試は一期校・二期校制度をとっていたから、それを取りやめて以来9年ぶりの復活である。

ただし、当時の複数受験は共通1次試験制度が導入されていなかったもので、同じ複数受験とはいっても、単なる復活ではない。いったん取り止めになった制度が復活するときは、その制度が抱えていた諸々の問題点も復活するというリスクを考えておかねばならない。

われわれは複数受験の問題を分析する計画を立てたとき、過去から潜在する問題点、いわば制度実施に伴う諸問題に注意を払うことにした。複数受験のもたらす諸問題については、既に色々と指摘されている。われわれはとくにその中で受験生の併願の仕方（これを併願行動と呼ぶことにする）に関心を払うことにし、無目的な行動と推察されるような学部選択が生じなかったかどうかという学部の選択の一貫性について評価することにした。これは進路選択の重要なテーマのひとつである「目的意識をもった大学・学部の選択」を遠く呪んだものである。

われわれの問題設定は以上のとおりであるが、今回は複数化の第1回であるから、まずは

受験生の併願行動の実態を描くこと及びその併願行動の主要な要因を取り出してみること、の2点に絞って分析を試みた。ここで紹介するのは、受験生の併願行動の実態に関する分析結果の一部である。見やすくするために、本稿では図を少しだけ手直ししてある。

併願行動における一貫性

A日程グループとB日程グループの両方（昼間課程のグループに限定）を受験した集団を対象に選び、彼らの併願行動がどのくらい一貫しているかについて調べた。併願行動の一貫性についてみる方法は、端的に述べれば、A日程及びB日程で受験生が併願した学部系統の一致・不一致の状況を要約することである。

例えば、A・B両日程で同じ学部系統を受験した者と、B日程では違う学部系統を受験した者がいるとする。こうした併願学部系統の相違を併願行動の一貫性という論理的な観点から捉え直してみようというのである。すなわち、同一の学部系統を併願した場合は一貫性が高いと評価し、違った学部系統を併願した場合は一貫性が低いと評価する。

ただし、ここで注意しておくべきことは、たとえ違った学部系統を受験しても、受験生本人の興味・関心などからみれば、案外理にかなっていることもあるし、または学部系統の名前が

違っていても教育内容の面でそれほど大差ない場合もあるかも知れない。

従って、行動の一貫性が高い低いという評価から、目的意識が高い低いの価値判断に安易に結びつけるのは性急であろう。目的意識に関わる分析は、本稿の分析からさらに進んで、併願行動の上での一貫性をもつ者とそうでない者だが、意識の上ではどう違うのかを検証する必要がある。

このため、ここで紹介する併願行動の一貫性の分析結果は、基本的には単に一貫性が高いか低いかを記述したに過ぎないことを改めて強調しておくことにする。しかしこれと同時に、こうした分析結果が、複数受験の諸問題を検討する上では、ひとつの有用な材料になり得ると考えている。

一貫性の表し方

併願行動の一貫性をデータによってどう表現するか。その方法を簡単に説明しておこう。

まず、国公立大学の各学部を学問分野からみた学部系統別に大分類した。本稿ではそのうちの9つの学部系統について報告した。つぎに、A日程とB日程の両方の学部系統を受験した併願者数のクロス表を作成した。このクロス表の対角線上にある各セルの数字は、同一学部系統を併願した人数であるから、この部分を一貫性の高い集団とみなした。そして、この対角部分から遠くに離れるほど一貫性の低い集団と考えることにした。

上記の考えは、要するに先の形式のクロス表を一貫性の基準によって一次的に表現するこ

とを意味する。従って、この方法的な課題を追求した結果、数量化III類を利用して、9つの学部系統を互いの「近さ」の順に並び替えることにした。

分析の結果、学部系統間の「近さ」を表すものとして得られたのが、法学系—人文・社会系—経済系—教員養成系—理学系—農学系—工学系—薬学系—医歯系の順位である。法学系と医歯系が両極に位置するという結果になった。

分析結果の一例

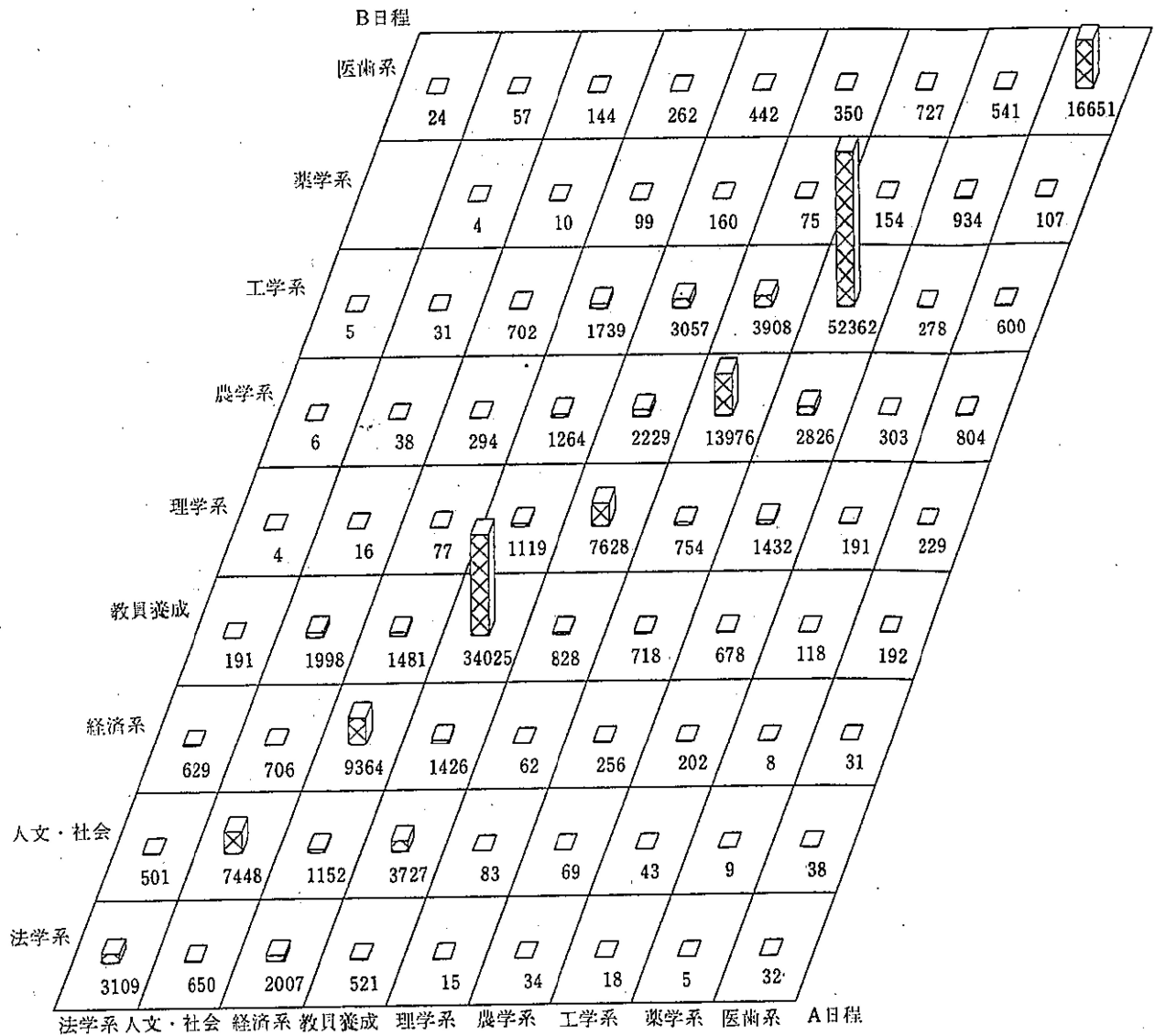
学部系統間の「近さ」の尺度を使って、A、B両日程の併願者をクロス表形式で図的に表現したのが、本稿の図である。図では横軸にA日程の学部系統、縦軸にB日程の学部系統を配置した。以下、図を簡単に説明して、われわれの分析結果の紹介としたい。

同一学部系統を併願した者は左下から右上に斜めに走る対角部分に見つけることができる。今回提示した図では条件を限定したので全体集団は、188,987人となったが、そのうち一貫性の高い集団と判定されたのは145,497人(76.9%)であった。この比率が高いか低いかは評価の分かれるところであるが、実態としてのこの比率はわれわれの予想より高い数字であった。

一貫性が最も低い集団は、この対角ラインから一番離れた部分であるから、具体的にはA日程で医歯系を受験しB日程で法学系を受験した場合か、あるいはA日程で法学系を受験しB日程で医歯系を受験した場合である。人数はわずかに56人(0.3%)にすぎない。少人数とはいえ、こうした併願行動をとる受験者の考え方を調べ

ると、どのような回答が返ってくるか興味のも
たれるところである。

(188,987人)



〈学部系統間における併願行動の一貫性の図〉

昼間のみ

- コード
- 1 : 法学系
 - 3 : 人文・社会
 - 4 : 経済系
 - 5 : 教員養成(芸術・家政は除く)
 - 7 : 理学系
 - 8 : 農学系
 - 10 : 工学系
 - 11 : 薬学系
 - 12 : 医歯系